

仏事ひとくちメモ

どこうろ 「土香炉」

お勤めをする時は、土香炉（陶器の香炉）に燃香ねんこうします。燃香は、線香を香炉の大きさに合わせて適当に折り、火を付けて横にねかせ灰の上に置きます。

※お線香を立てて用いることはしません。



香炉の三本の足は、一本が正面にくるように置きます。

※イラストは土香炉の一例です。

真宗大谷派
名古屋別院

☎ 460-0016

🏠 名古屋市中区橋2-8-55

☎ 052-321-9201

📠 052-321-3184

<http://www.ohigashi.net/>

お東ネット

検索

そうぎ
葬儀を
えん
縁として

真実の教えに出で遇あう
6



このリーフレットは、
環境に配慮したインク、
用紙を使用し作成しました。

10.02.
10.000

h i g a s h i b e t s u i n

葬儀を 縁として

より豊かに、より快適に、より便利にと、とどまるところを知らぬ現代の肥大化した欲望に流されるわたしたちは、却^{かえ}って生活にゆとりを失い、自己主張ばかりが目立ち、人間関係^{わづら}が煩わしくなっていないでしょうか。

そうしたわたしたちの生き方は、いまや^{いた}到るところにその影を落とし、^{げんしゆく}厳肅な「死」までが病院や施設の中に^{いんべい}隠蔽され、葬儀さえ最近^{ちよくそう}は直送などという言葉も現れて行わない動きが見え始めているありさまです。

ここであらためてわたしたちに問われることは、「いのち」の尊厳さにちがいません。人としてこの世に生まれ生きるには、いかに多くの人や物との関係があたえられて

可能なことであることか。その意味で、人の世の大きな恵みへの謙虚さこそは、残された者の姿勢であり、人の道でありましょう。しかもそこに立つことによってのみ、悲しみをとおして仏の正法に対座する縁があたえられるのです。

そのことは、先だてる人の死が自分を見る鏡として、向きあっていく生活が始まることと言えましょう。その人がどのような生きざま・死にざまであろうとも、それはそのまま自分にとって、生きることの意味を問わしめる^{ぜんちしき}善知識（人生の教師）だからです。



いまや高齢化社会、しかも世界一の長寿国の日本。「いのち」が常に話題になりながらも、「どれだけ生きるか」という量的いのちにばかり関心して、「どんないのちを生きるのか」という質的いのちが自問されなければ、量的な長寿は決して単純には喜べないでしょう。そうしたわたしたちに、「幸せの条件と幸せそのものは、異質である」と、^し報らせるいのちの真実の声、それがこの口に表れる「なむあみだぶつ」でした。

ここに自分にとって「葬儀」は、「死」を師として「生」を生きる！宣誓式であり、先だてる人生の先輩（諸仏）への最後のご奉仕として、厳重に執り行う儀式です。

さあ、真実の教えに会いましょう。

いけだゆうたい
池田勇諦（同朋大学名誉教授）